

---

IS-W

kanashi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS - W

### 【Nコード】

N8436S

### 【作者名】

kanashi

### 【あらすじ】

傷ついた天使は落ちて行く

それは、傷つき力尽きた故なのか

それとも、誰も傷つけないためなのか

それは戦いだつた

天使と戦士による2体だけの戦い

何故、この光景を俺は見ている

貴様を に行かせるわけにはいかない

お前が戦えば戦うほど の犠牲が無駄になっていると

の戦争は終わっている

だから は要らんのか

この光景は、俺と の

教えてくれ

俺たちは後何人

俺は後何回 とあの子犬を

せばいいんだ

は俺に何も言っではくれない

教えてくれ

傷ついた天使は落ちていく

暗く深い海の底へと

IS・W・01(前書き)

ヒイロの喋り方や思考が分からない・・・

「全員そろってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

俺は今、IS学園にいる。IS Infinite インフィニット Stra ストラtosと呼ばれる兵器の操縦者育成用の学校にだ。

それはありえない光景である。周りは全て女性で埋め尽くされている。そう、ISは女性しか動かせないはずなのにそれを動かした俺は強制的にこの学園に通う事を義務づけられた。

先ほど言葉を述べたのは小柄でメガネを掛けた1年1組副担任山田真耶。幼く見える容姿をしているが日本の元代表候補生であり、実力は確かに存在するはずの人物だ。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「.....」

その言葉に誰も返答を返さない。妙な沈黙が続き、誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

「……」

目を閉じながらこの学園に入ることになった事を思い浮かべる。

中学の受験の頃、俺は高等学校へ進む気はなく働くべき職を探している時に姉に

仕事を探すのは高等部を出てからにしろ。

と、言われたのでそれに従い最も家から近い所の受験を受けるべく試験会場へ向かっていた。

去年起こったカンニング事件のせいで受験会場変更の通知が二日前に送られてきて、4 駅先の場所まで移動することになったのだ。

「ここか…」

歩き続けると会場に着いき、試験会場の詳しい場所を知るために受付の人に尋ねた。

「私立藍越学園の受験場所はどこだ」

「え？ ああ、その場所なら」

「分かった」

「頑張ってくださいね」

話を聞き終わると、言われた場所へ移動を開始した

私は先ほどの子が去っていく後姿を見送った。

「最近の子は落ち着いてるのね」

そう考えて、はて？ と疑問が湧いてきた。

「あの子、なんで男の子のくせにIS学園の受験会場を聞いてきたんだろうか？」

受験を受ける誰かの忘れ物でも届けに来たのかな？

私は、その事に疑問を抱いたまま首を傾げた

「ここか…」。

先ほど受付で聞いた場所にたどり着き、扉を開けた。



「受験生だね？ 早く向こうで着替えてきて。時間押しているから」

部屋に入ると、そのような言葉を投げかけられた。

どういう事だ…

俺が投げかけられた言葉に質問を返す前に、俺に指示をしてすぐに部屋から出て行った。

「…」

仕方がないので、指示された場所のカーテンを開けると、奇妙な物体が鎮座していた。

「ISか」

ここにISがあるという事は受験会場を間違えたことになる。

あの受付の奴は俺の言葉を聞き間違えていたのか…。

「男には使えない兵器か…」

「何してるの！ 時間がないから早く準備なさい！…」

俺がISを見ていると先ほどの奴が戻ってきたと思うと、俺を見て怒った表情に変化した。

「なんで、男がここにいるんですか!!」

と、急に俺を突き飛ばしながら質問の言葉を投げかけてきた。あまりにも急な事だったので反応が遅れた俺は、ISの近くまで飛ばされた。

「受付に聞いた受験会場が間違っていた。私立藍越学園の受験会場を聞いたのだが」

「そうだったの、あの子か…。全く仕事もちゃんと出来ないのかしら…」

そうつぶやくと、溜息を吐き頭に手を置いて、やれやれと頭を左右に振った。

「それで、受験会場の場所なのだが」

「あ、ごめんなさいね突き飛ばしてしまって。立てるかしら?」

「問題ない」

俺は近くにある物に手を付けて立ち上がるうとしたが、

キンツ、と金属音の様なものが頭に響いた。そして、意識に直接流れるようにさまざまな情報が頭の中に入ってくる。

「な…、なんでISが動いているの!!」

先ほどの奴が驚いているがそれも無理はないだろう。ISという兵器の絶対的な条件として男が動かす事は出来ないのだ。それなのになぜかISが起動している。驚くのも無理はない。

この状況になった事で、俺の進むべき道は確定した。

「次は、織斑おりむら一夏いちかくんっ」

どつちら、俺の番が回ってきたらしい。

「織斑一夏だ」

周りを見渡してみると、他の視線とは違う低温の視線を感じる。

「えっと、以上ですか？」

「ああ」

「お前はもう少し愛想良くする事は出来んのか…?」

何者かが教室に入ってきたので、そこに目を向けると俺の姉、  
織<sup>おり</sup>斑<sup>むら</sup>千<sup>ち</sup>冬<sup>ふゆ</sup>が立っていた。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

などと、場を無視して話出す二人。

「姉さん、その様な話は後にしろ」

「そうだな。だが、学校にいる間は織斑先生と呼べ」

「了解した」

姉は話が終わると、教卓の前に立ち、

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠一五才を一六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

と、言い放った。すると

「キヤアアアアアアツ！ 千冬様、本物の千冬様よっ！」

「ずっとファンでしたっ！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんですっ！ 北九州からっ！  
！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいですよっ！」

「私、お姉様のためなら死ねますっ！」

などと、黄色い声が教室中から響き渡る。

「……毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか

「？」

「きゃああああああああっ！ お姉様っ！ もっと叱ってっ！  
罵ってっ！..！」

「でも時には優しくしてっ！」

「そしてつけあがらないように躡をしてっ！」

その様な奴等をうっとうしそうに見る姉がこちらに顔を向けてきた。

「それで？ お前はそんな様な自己紹介しかできんのか？」

「ああ」

まったく、とばかりに顔を左右に振る姉。

そして、このやりとりを見ていた教室中から声が上がります。

「えっ……織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で唯一男でISが使えるっていうのもそれが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあ」

などと、未だ興奮冷めやらぬ教室が姉の言葉で静かになってゆく。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

「……ちよつといいか？」

一時間目のIS基礎理論の授業が終わった休み時間に俺に話しかけてくる奴に目を向ける。

そこには、髪形をポニーテールにした女が立っていた。

「…篠ノ之箒しののへか？」

「…廊下でいいか？」

「良いだろう」

そのまま廊下にいこうとするとザマーと道が開けた。そして、廊下にでると野次馬が俺たちをある一定の距離を保ちながら囲った。

「……………」

「……………」

両者が沈黙したまま時間が過ぎる。

「久しぶりというべきか」

「ああ……………」

「話す事がないのなら戻るぞ」

その言葉を聞き、筭は驚いた顔を見ると表情がやわらかくなった。

「お前は変わってないな」

「そうか」

「ああ」



再び沈黙が訪れると授業開始の鐘の音が響き渡る。それまでこちらをうかがっていた奴らも蜘蛛の子を散らしたかのように散っていく。

「私達も戻るとしよう」

その言葉と共に俺たちは元来た道に戻りだした。

「ちょっと、よろしくって？」

二時限目が終わった後、本を読んでいると声をかけられたので本から目を離し、声をかけてきた相手に視線を移す。

鮮やかな金髪に、白人特有の透き通った様なブルーの瞳が、ややつりあがった状態でこちらを見ていた。

「イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットか」

その人物には心当たりがあった。

セシリア・オルコット。第3世代型IS『ブルーティアーズ』を使用するイギリスの代表候補制。

「あら、私の事を知っているのかしら？ まあ、当然ですわね。このイギリスの代表候補生にして入試主席である私の事は知っていて当然ですわね。」

わざわざ、当然と二回も繰り返して言う必要はあったのだろうか……。

「何の用だ」

「まあっ！ なんですの、そのお返事！ わたくしに話かけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「……」

「まあ、今回は許して差し上げましょう。本来ならわたくしの様な選ばれた人間とあなたのような人がクラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ。そのところをちゃんと理解していただけないかしら？」

ISを操縦できる女は男よりも優れていると考える者は多い。それに彼女は確か確か名家の出だったはず。それが拍車をかけて他の

人 主に男 を見下す様な態度を取っているのだろう。

「それで？」

「またそのような言葉を！ まあ、私に対してその様な言葉使いをする所は後々直していくとして、わたくしの様に優秀で心が広い者は、あなたの様な人にも優しくISの事等を教えてさしあげてもよろしくてよ。」

「必要ない」

瞬間、時間が凍ったように一瞬止まった。

「あ…、あなた！ このセシリア・オルコットの好意を受け取る気がないと言いますの！？」

「…」

話は終わったとばかりに、視線を本に戻し始める。

俺の返答が気に入らなかったのか、セシリアは釣り目を細めて「ちらを睨んでくる。」

「ちょっと！ 話はまだ終わっていませんのよ！…」

パンツ！ と、セシリアは両手で俺の机を叩き、視線を戻そうと  
している。

「大体、あなた唯一男でISを操縦できるからこの学園に入る事が  
出来たのでしょうか？ たったそれだけでISの事を何も知らないあ  
なたに、このわたくしが直々に教えて差し上げようと言っています  
のに、その好意を無視すると言いますの!？」

本を読んでいた視線を上げ、セシリアを見る。

「時間だ」

「はあ？ 何が時間ですの！分けの分からない言葉で……」

「そいつの言う通り、時間だセシリア・オルコット」

と、織斑先生は手に持っていた出席簿でセシリアの頭を叩く。

「ッ……」

「早く席に戻れ、すでに授業が始まっている時間だ」

「お、織斑先生……」

叩かれた頭を押さえながら、すでに授業が始まっている時間である事、それに気づかないほどに冷静ではなかった事に急に頭を冷やす事で気づいた。

この私が…。

とんだ失態をおかしたものだ、学校が始まった初日にこの様な…。それもこれも全部あの男のせいですわ！！

キツ！ と、この様な失態をおかせた男を睨みながら自分の席へと戻っていった。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

織斑先生は教壇に立つと授業を始めようとしますが、

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

と、思い出した様にその様な言葉を言い放った。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会などへの出席…まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが競争は向上心を生む。一度決まると何か大事が無い限り一年間変更はないからそのつもりで」

クラスが騒々しくなる。あちこちでどうするのか？誰がなるのか等の話声が聞こえる。

「はい。織斑君を推薦しますっ！」

「私もそれがいいと思いますっ！！！」

最初の声が上がると同時に、あちこちから賛成の声が聞こえてきた。

「では候補者は織斑一夏・・・他にはいないのか？ 自薦推薦は問わんぞ」

「…」

俺はどうでもいいので何も喋らなかった。

「待ってくださいつ！ 納得がいきませんわっ！」

バンツ！という机を叩いた音とともに立ち上がったのはセシリア・オルコットだった。

「そのような選出は認められませんっ！！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥曝しですっ！ しかもこの様な礼儀を知らない人を代表にしておくなんて屈辱を、このセシリア・オルコットに一年間味わえとおっしゃるのですかっ！？」

「…」

「實力から行けば私がクラス代表になるのは当然、それを物珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困りますっ！ 私はこのような島国までIS技術の修練に来たのであってサーカスをする気は毛頭ございませんわっ！」

段々と、言葉が強まってくる。

「いいですかっ！？ クラス代表とは實力トップがなるべき、そしてそれは私ですわっ！」

「ならお前がやれば良い」

俺の言葉にセシリアがこちらを睨みつけてくる。

「代表になりたいのなら好きにしる。俺が降りればそれで…」

「それは却下だ」

言葉の途中で、織斑先生に止められる。

「他薦の場合、拒否は出来ない」

「…」

「なっ…」

その言葉にセシリアは声を驚愕をあらわにする。

「なぜですの！…この様な者が…」

「セシリア…。お前もそこまですておけよ?」

織斑先生が少し怒気を込めながら睨むと、セシリアはビクッとその身を震わせた。

「なら俺はセシリア・オルコットを推薦しよう」



セシリアが驚愕の目でこちらを見てきた。

「それなら構わないと思うが？」

「まあ良いだろう。しかし、そんなに代表になるのは嫌か？」

「どうでもいい事だ」

俺の返答を聞いてセシリアが体をわなわなと震わせる。

「どうでもいい…ですって？ 代表となる名誉を、その意味も知らないあのような男に…」

セシリアがこちらを殺さんとする勢いで睨んできた。

「決闘ですわ！！」

「決闘だと？」

「ええ、貴方の様な男は徹底的にたたきのめして差し上げますわ！」

俺はその言葉を聞き、姉に視線を向ける。

「お前たちがそれで納得するのなら構わんよ」

それはつまり、この決闘を受けろという事か。

「それで？ ハンデはどれくらいつけますの？」

「…、必要ない」

その返答で、セシリアの怒りが最高潮に達した。

「そうですね！！ そのような選択をした事をせいぜい後悔する事ですわ！！」

セシリアは話は終わったとばかりに、こちらから視線を外した。

「ねー、織斑くん。今からでも遅くないから、セシリアに言ってハンデ付けてもらいなよ」

「その考えは代表候補生をなめすぎだよ？ それとも、知らないの？」

周りの奴らに話しかけられるが、どうでも良いとばかりに無視を

続けた。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

IS・W・01(後書き)

書きたい部分の考えはあるのだが、こつこつ日常的な部分をどつす  
れば良いのかわからない・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8436s/>

---

IS-W

2011年5月28日00時02分発行